

この雨が止むと大陸から高気圧が広がり、冬将軍が今年初めて到来されるそうです。急激な気温の変化で体調を崩すことがありますので、「注意一秒、怪我一生」と気をつけてください。この通信も近代の哲学に入って、ますますややこしくなっています。その理由は、私の考えでは、近代の哲学者の言うことがやや、いやかなり常識からずれているからというのが一つの理由ではないかと思います。そこで、おそらく端っから読まない人もいるでしょうが、「食わず嫌いはいやじゃ、せめて半分だけでも読んでみてやろう」という殊勝な方々には、これを読むには多少の勇氣と忍耐がいることをあらかじめ言っておきます。読みながら気分が悪くなったり、頭がくらくらしたりするのを感じたら、即座に読書をやめるようにお願いします。試験前の大切な体ですから。



さて、前回カントの認識論（哲学の一部で、人の知る能力についての学問）について話しをしましたが、ある大学の先生から注意があり、変更しなければならない部分がありました。それで、もう一度、説明をやり直したいと思います。みんなにとっては、「そんな細かいこと、どうだってええやないか」と思うかもしれませんが・・・。

カントは、ニュートンの物理学を初めとした自然科学の画期的な発達を前にして、科学によって自然界のを知ることができることには疑問を挟まなかった。しかし、「どうやって、その科学の知識を得ることができるのやろか」と考えました。簡単まとめると（詳しく言うとすごく難しい）人間の知性（カントは感性、悟性、理性という三つの段階を考えました）の中に、生まれつき（哲学の言葉でア・プリオリ）と言います。その反対が「ア・ポステリオリ」と言って後天的になどと訳されたりします）の整理ダンスがあるというのです。つまり、人間は経験（感覚）によって、外の世界から色々なデータを仕入れます。このデータはばらばらなものなのですが、人間の知性がそれらばらばらのデータを仕分けして、整理ダンスに入れていくというのです。この整理ダンスのことを「カテゴリー」と呼び、12の引き出しがあるというのです。このカテゴリーの中に「実体」や「因果律」があるのです。こうやって、感覚を通じて知性に送られた様々なデータは、きちんと整理されてしまうのです。だから、科学はきっちりした法則を引き出すことができる、というのです。でも、それはあくまで現象（つまり人の目に見える世界）のことに限られます。前回、カントが人間には知ることができないとした「物自体」が「実体」だと、私は言いましたが、カントのいう「物自体」は「実体」ではなく、「現実に存在するもの」でした。

カントの主張は、「昔の人々は、まず外の世界の存在があって、それを元に人間が知識を得ていくと考えておった。例えば、黒いカラスを見て、人は『カラスは黒い』と知るのだ、と。ところが本当はその逆なのじゃ。人間の知性が『カラスは黒い』と理解するから、カラスは黒いのじゃ。この逆転の発想をコペルニクスの転換と名付けよう。なぜなら、ちょうど天体の複雑怪奇な動きを正しく説明するためには、天体が地球の周りを回っていると考えのではなく、実は動いているのは地球の方で、太陽は止まっているのだと考えた方がいいと気がついたコペルニクスの発見と同じだからじゃ」となるでしょう。（でもよく考えると、コペルニクスの考える地動説は、地球が中心という人間中心の見方を覆したものですよね。でもカントは、「世界が主で人間が従」という考えをひっくり返して、「人間が主で、世界がそれに従う」と考え得たのだから、コペルニクスの考えの逆です。だから、カントの

言う「コペルニクスの転換」とはどういう意味に取れば良いのかについては論争があるようです。またご存じでしょうが、コペルニクスはポーランド人のカトリックの司祭です。

ともかく、『純粋理性批判』の結果は、「人間の理性が知ることが出来るのは現象だけであって、現実を知ることはできない」ということになりました。そうすると、カントが自分が知りたいこととして、「神、世界、人間（魂）」と言った三つのテーマについては、「なにもわかりまへん」ということになるのです。でもカントは「これにて一件落着」と幕を下ろしてしまっただけではないのです。

と言うのは、実は理性には、理論的な面と、実践的な面がある。このことは古代から知られていました。理論的な面とは学問をするときに使う理性で、実践的な面とは個々の行いに関する理性の判断です。実際、学校の勉強がよくできても（つまり理論的理性が発達している人）、実生活の人間関係をうまくできない人もいます。逆に人間関係などは上手だが、学校の勉強はだめという人もいます。政治の世界や商売の世界は、特に実践理性が重要でしょう。そういう世界において、別に有名大学を出ていなくてもめざましい成功を収める人は珍しくない。これも理性に理論的な面と実践的な面があることを示していると言えるでしょう。

そして、カントはこの実践理性に注目しました。カントの言う実践理性というのは、道徳的な判断をする理性のことです。彼によれば、人間は誰でも「善を行え」という命令を心に感じる。彼の考えでは、この命令は絶対的、つまり何らの条件ももたない無条件の命令（カントはそれを「定言命法」と呼ぶ）です。言い換えれば、理性は自分以外から何らの影響も受けずに、「義務を果たせ」と要求する。それに対し各人は、無条件に従う必要がある。無条件ということは、「ええことしたら、何かご褒美をもらえるかもしれん」というような浅ましい心を待たずに、この善行は「義務であるから」という理由で果たすことを言います。例えば、「困っている友達を見て『かわいそうだから』と思って助けるのはよくない。『それは義務だから』という理由で助けるべきだ」というのです。これは人間に備わっている感情や傾向を無視した行き過ぎですが、彼の意図は、当時はやっていた「道徳なんて人間の都合に合わせたらええ」というような功利主義的な道徳に反論しようとするところだったのです。

そして、カントはこの実践理性に注目しました。カントの言う実践理性というのは、道徳的な判断をする理性のことです。彼によれば、人間は誰でも「善を行え」という命令を心に感じる。彼の考えでは、この命令は絶対的、つまり何らの条件ももたない無条件の命令（カントはそれを「定言命法」と呼ぶ）です。言い換えれば、理性は自分以外から何らの影響も受けずに、「義務を果たせ」と要求する。それに対し各人は、無条件に従う必要がある。無条件ということは、「ええことしたら、何かご褒美をもらえるかもしれん」というような浅ましい心を待たずに、この善行は「義務であるから」という理由で果たすことを言います。例えば、「困っている友達を見て『かわいそうだから』と思って助けるのはよくない。『それは義務だから』という理由で助けるべきだ」というのです。これは人間に備わっている感情や傾向を無視した行き過ぎですが、彼の意図は、当時はやっていた「道徳なんて人間の都合に合わせたらええ」というような功利主義的な道徳に反論しようとするところだったのです。

カントはここから重要な結論を導き出します。つまり、理性がこのような道徳的命令をするという事実をつらつら考えるに、次のような結論が現れる。すなわち、まず人間は自由であるということ。自由でなければ、「善を行え」という命令は無意味。犬に向かって、「善を行え」と言う人はないでしょう。次に、義務があるということは、義務を課した者、すなわち最高の立法者である神の存在を示している。また、この世で報いを求めずに善を行った者は、あの世で報いを受けるべきだから、魂は不死であるという結論が出てくる、というのです。つまり、カントが『純粋理性批判』で「それが存在しているかどうかはわからない」と結論した「神と魂」の存在が、『実践理性批判』で証明された、ということになります。

これは純粋理性より実践理性の方が大切だということを意味しています。実践理性は人の行為に関係します。人の行為は意志によって動かされます。ということで、19世紀の中頃から、理性より意志に注目する哲学者が出てくることになりました。でも、その前にカントが、「その存在はわからんけれど、あるはずじゃ」とした「もの自体」が「存在があるかどうかわからんなんてけったいなものはあるか。そんなものはないんじゃ」と一掃されることになります。

